

「号泣の夜」

明星学園 宮下 智

N男さん、性格は超内向的、超緊張型、40才を過ぎた今でも、その原型は変わらない。今からおよそ三十年前、入所したしたばかりの彼が、初めて職員・家族と一緒に出かける5月のバスハイクで（その当時は家族遠足という名の一大イベントで）、目的地の恵那峡ランドへ向かうバスの中は、終始立ちっぱなし、自律神経失調状態の汗が背中を、顔を吹き出すように、たらたら流れ、バスからやっと降りたものの恵那峡ランドには入れず、入り口の手前で両手を怯えたように振りながら、ピョンピョン跳ねていたのを思い出す。結局最後まで恵那峡ランドには入れず、帰りのバスの中も上着までもビショビショになるような汗まみれだった。

その頃、学園では大便をすることができず、一週間に一回の帰省日に何回も自宅でトイレに通い、便秘で溜めた一週間分の大便を安心とともに流していたのも思い出だ。

一日の多くの時間を指先を口に持っていき啜え、尖足で玄関付近で立って過ごした。よだれが上着の裾を伝い、指先は真っ白にふやけた。

20年前、彼が入所以来、初めて怒りを爆発させた場面があった。食事のテーブルをいきなりひっくり返し、目に顔に怒りの表情が浮かんだ。不安や心配、怯えや遠慮がそれまでの彼のできる感情表現であって（もちろん超濃厚な性格の彼であるけれど）、彼の生活は怒りとは無縁なところにあったから、よっぽど我慢しきれないことがあったことが想像できた。彼の走って行った先には、破かれた母親の写真があった。しかも帰省を知らせるスケジュールに貼ってあった母の写真が破かれていたのだ。彼は、その破かれた写真を何回も何回もトントンと指差し、怒っていることを職員に伝えた。

職員は伝える。「ごめんね、早く気が付かなくて。お母さんの写真を破るなんて、本当に頭に来ちゃうよな。いつも許してくれるなんて思わないで欲しいよな。僕だって何回も破かれれば、ちゃんと頭にくるんだ。なめるなよだね。しかもお家に帰るのを教えてくれている写真を破るなんてひどいよね」彼の怒りは、職員に自分の気持ちを言語化されることで次第に収まっていく。

彼はこうして〈怒り〉の感情を手に入れた。それまでの彼にとって〈怒り〉は、決して出してはいけないものだったに違いない。不安や心配、怯えや遠慮は、行き着くところ自分の無力感にたどり着く。誰も責めることのない自責的な感情だ。ところが〈怒り〉は、相手を攻撃する他罰的な感情だ。自分のことはさておいて、「お前が悪い」と言い放つことをしなければならぬ。内向的で濃厚な彼には、今までできなかった人間関係の持ち方だ。〈怒ることができるようになった〉、これが今回の件の正しい理解の方法だ。

彼は、非常にゆっくりであるけれど確実に幸せの階段を登っていく。もともと原型が超内向的、超緊張型である彼である。変化は、ゆっくりが当たり前、それが彼の〈マイペース〉なのだ。焦らず、慌てず、彼の内面が熟成して動き出すのを見守っていくことが大切だ。

学園で大便ができるようになった、初めての場所でも入ることができるようになった、買い物の内容などカード選択を自信をもってできるようになった、大型店の中でも落ち着いて移動できるようになった、外食ができるようになった、一泊旅行に行くことができた、ホットケーキの絵本が大好きになった、ホットケーキを職員と作りたいと伝えることができた……、そして夢プラン挑戦の時が来た。

〈夢プラン〉、ひそかに心の奥に持ち続けた、「いつか叶えられたら良いな」という想い、それが〈夢プラン〉だ。

職員となら買い物ができる、職員となら温泉に入ることができる、職員となら外食ができる、職員とならホットケーキを作ることができる…、こんな幸せのかたちは実は不完全だ。職員とできるようになったことを基盤として、父親や母親とできるようになること、それが本来の幸せのかたちだろう。お母さんと買い物ができる、お父さんと温泉に入ることができる、ご両親と外食ができる、帰省時にお母さんとホットケーキ作りをする…。最初は職員の助けが必要だろうが、最後には誰の助けも得ないで、親子だけで実現できることが、本人にとって最も嬉しいことのように思える。

誰の助けも得ないで、ご両親と上手に付き合うことができるようになった自分、親の前でどんなに誇らしげ

に思うだろう、ご両親だって、安心と安堵で我が子の成長を感じることができるに違いない（「これなら我が子よりも先に亡くなっても大丈夫だ…」）、なんてね、ちょっと言い過ぎ？）。

さて、N男さん、第一次夢プランは、本人と相談の上、〈お父さんと温泉に行く〉と決まって、計画がスタートした。それが四年前。

その一方で、彼の発信、意思伝達能力は確実に増しつつあった。

ある日、彼は自分の居室に戻ることを拒否した。他のメンバーの居室に入り浸っている。それらの居室の共通点はベッドだった。どの部屋にもベッドが置いてある。職員は訊ねた。「ベッド欲しいの？」彼は大きく頷いた。

が、ベッドが居室に入った時、彼は足が腫れ、嘔吐した。職員が「ベッド、良かったねえ、でも何か心配なことがあるの？」と聞いた途端に彼の表情に緊張が走った。

実は、買い物は自己表現だ。何を買うか、いくらのもを買うか、その一つ一つの要素が、意思決定を伴い、特に感情を抑え込むことの多いN男さんのようなタイプの方にとっては、いつもチャレンジなのだ。「ベッド買ったこと、怒られるような気がするの？」彼は頷いた。足が腫れたのは、「一人じゃ立ってられない、歩けない」という自立への不安が高じている証拠、嘔吐は、心の葛藤状況、つまり二つの反対の気持ちがせめぎ合っている証拠、そう考えた職員は「お母さんにベッド見てもらおうか？買うときに、お母さん、いいよって言うていたから心配しなくてもいいと思うんだけど、やっぱりちゃんと見てもらわないと、心配になっちゃうよね。こんなに良いの選んだんだよって、威張っちゃおうね」、彼はニコッと笑顔でYESを返した。これで、彼の足の腫れと嘔吐は、ピタッと止まった。怒られるんじゃないかと心配しながらも買ったベッド、これが自立の象徴、お母さんに見てもらおうか、それとも止めようか、それが心の葛藤だったのだ。

そして今年の中旬、眠れない夜が続いた。そして3日目の晩、彼は職員の手を引いて居室へと導いた。そして、今年度異動になったO職員の写真とホットケーキの写真を盛んに指さす。O職員は元担任男性職員、そしてホットケーキは愛着（好き）の印だから、通訳すれば「Oさんのこと、大好きだった」ということになる。「また、会いたいよねえ。他のメンバーさんたちも会いに行っているしねえ、早く気が付かなくてごめんね。3月の誕生日に買ったバリスタで、コーヒーを入れて持っていくのはどう？」そんな話をしているうちに彼の目からは涙が流れ始めた。「好きだったんだよね。寂しいんだよね。」職員が言葉を重ねるたびに涙があふれる。「泣いていいんだよ。寂しい時には、みんな泣くんだよ。泣くとちょっぴりだけど、気持ちが晴れるんだ。私の前で泣いてくれてありがとね。その泣きたい気持ち、Oさんにきちんと伝えようね」

彼が40数年の人生の中で、初めて寂しくて悲しくて号泣した夜だった。

〈怒ってもいい〉とわかった日から20年、彼は今度は〈泣いてもいい〉を手に入れたのだ。

その後たまたまホームセンターの買い物中に会ったお母さん、「ねえ、園長先生、家の子、泣いたんだってねえ、O先生に別れて寂しくて泣くなんて、それだけ好きだったということだよねえ。こんな日が来るなんて思わなかったよ。好きな人と別れて、泣けるなんて。家の子、すごいよね」お母さんの満面の笑みの中からこぼれるこのポジティブメッセージ、一番聞きたかったのは、きっとN男さんだろうな…？

WELCOME TO SATORU WORLD

障がい者支援施設明星学園における心のケア

<http://myojo-satoru.life.coocan.jp>

Facebook : <https://www.facebook.com/satoru.miyashita.1>